

人材受け入れる文化・魅力を発信

和合館工学会

地域建設業ダイバーシティフォーラム

和合館工学会（小野貴史代表理事）が「働き方改革とダイバーシティ経営」をテーマに開いた地域建設業ダイバーシティフォーラムでは、大政建設（熊本市）の森山澄江代表取締役、常陽建設（茨城県取手市）の飯田竹世代表取締役、中村建設（奈良市）の曾我部幸代取締役と、清水建設NOVAREプロモーションユニットの白木綾美氏、かまた行政書士事務所の鎌田いづみ代表、写真家の山崎エリナ氏が登壇し、働きやすい職場環境や建設業の魅力発信の在り方などを幅広く話合った。



さまざまな視点に立ち
多様な働き方認める

前半の講演では、建設業にかけるそれぞれの思いを話した。森山氏は、



左から、森山氏、飯田氏、曾我部氏、白木氏、鎌田氏、山崎氏

熊本県建設業協会、熊本県内の建設産業で働く女性の集まりである「くまもと建設会」などでも活躍しており、公共トイレの清掃、子ども向けイベントの開催、資格試験のサポートなどの活動を通じて「建設業で輝けること」を発信し、建設業界の魅力を伝えていくことを紹介した。

大政建設で展開する女性目線の現場パトロール「女子パト」にも言及。通常の安全パトロールの視点ではなく、現場のいいポイントをほめる「褒めパト」として実施しており、「技術系の経験がなくてもストレスなく取り組めることから社内でも評価されている。発注者からも注目を浴びている」と話した。

飯田氏は、社長就任時から「自分を大切にすること」を社員に呼び掛けている。会社に対する意見を投函（とうかん）する意見箱といった、個人の考えを経営に反映しやすくする同社の取り組みを説明。「組織の中で、個人が能力を生かせることが重要」とし、「個人の価値観を受け入れる感覚を持つことがダイバーシティにつながる」と強調した。

曾我部氏は、他業種から建設業に転職した経験から「建設業が身近な存在であることに気付いてほしい」



小野代表理事

と思いを込める。出産や育児を経て活躍していることも「中村建設の柔軟性に助けられてきた」とし、「今度自分先頭で立ち上げて育児や介護をしながら仕事を続けられる組織をつくらせていく」と働きやすい環境の整備に精を出す。外国人や障害者の雇用に向けた姿勢も、柔軟な社風ならではだという。

白木氏は、大学の在学時に全国土木系女子学生の会を立ち上げ「ドボジョ」を広めるなど、長きにわたって土木や建築の魅力を発信し続けている。現在も土木学会の会長特別プロジェクトをはじめ、さまざまな場所での建設業について積極的に情報交換しており、「会社だけでなく、横のつながりがあると他社にもロールモデルを見つけられる。建設業界が一体となってダイバーシティに取り組む必要がある」と述べた。

働く人の持つリアルな姿
人の魅力は建設業の魅力

業界の外側から見た建設業の印象について、鎌田氏は「建設業は専門性が高く、人材の定着・育成が大切だが、一方で離職率が増えている」

と懸念を示した。人材の定着には、働く中で感じる「違和感」を男女双方で会話する場を設ける必要があるとし、「若手の違和感解消が未来につながるのではないかと呼び掛けた」。

山崎氏は、建設現場で働く人の底力や使命感、極寒や猛暑でも集中力を切らさないひたむきな姿を写真に収め続けている。「建設業の写真を撮り始めてから、写真は人の人生に寄り添うものだと、より一層実感した」という。山崎氏のダイナミックな作品は、業界だけでなく、小さな子どもがいる母親世代からも評価を得ている。「普段は見えない現場を知ってもらい、働く人のリアルな姿を見せる。人の魅力は建設業の魅力そのものだ」と力を込めた。

環境改善の固定観念
取り除くことも必要

これを受けたパネリストからは、これを受けたパネリストからは、Yonでは、小野代表理事からの「建設業界で働きやすい条件とは何か」という問い掛けに対し、森山、曾我部の両氏は「学生時代に土木や建築に触れていなくても、建設業に入職できる環境、文化であること」と声をそろえた。森山氏は「さまざまな専攻の学生を受け入れるには、経営者だけでなく、現場で若手を育成する立場の社員の意識改革が必須だ」と話した。曾我部氏は「他業界からの入職者が建設業界で活躍している実績をつくり、若手のモデルとなれ

ば良い循環が生まれる」と期待を寄せた。現場など職場環境の整備が入職者の増加につながるかという問いに対しては、白木氏は「女性用の作業服やきれいなトイレの整備は、女性入職者を増やす根本的な解決策にはならない。現場の環境を改善する上で固定観念を取り除くことも必要」と指摘した。

鎌田氏は「建設業は身近な産業にもかかわらず、現場の困いの中で仕事をしているため姿が見えにくい」とし、建設業の仕事を広く知ってもらう上での障壁をなくす努力が必要とした。

飯田氏は「ゼロからのづくりをするエネルギーと達成感、他の業界では味わえない」と建設業の醍醐味（だいごみ）をアピール。「資格の取得など、技術者としてスキルアップできる環境を強化することの重要性も説いた。建設や土木の魅力は時間を掛けたからといって伝わるものではなく、本人がどのようなタイミングで建設に興味を持つのかも重要だ」という声も。

こうした議論を通じて、安心して働ける現場の環境を整え、建設業に興味を持つ人を幅広く受け入れるマインドの醸成や体制の整備が、多様な人材が建設業で長きにわたって活躍できる基盤になることを確認。また、業界内外の「建設業のファン」からの働き掛けも建設業に興味を持つきっかけとなり、業界の発展に大きな役割を果たすとした。小野代表理事は「登壇した皆さんのような、しなやかな人材が建設業にいてほしい大切なこと。それぞれの形で業界の魅力を発信していく」と締めくくった。

業界内外のファンも興味持つきっかけに

